第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ミヤコヒバァ

Hebius concelarus (Malnate, 1963)

戸田守（琉球大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　爬虫類・両生類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：戸田守，2026．ミヤコヒバァ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 93-97．

Citation: Toda, M., 2026. *Hebius concelarus* (Malnate, 1963). *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 93-97.

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ミヤコヒバァ

***Hebius concelarus* (Malnate, 1963)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2. 生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息が確認されている地点を含む緑地は互いに分断されており、なおかつ、それらを地理的に分かつ地域では断続的に大規模な圃場整備等による土地改変が進んでいる。そのため、本種の生息地は過度に分断された状態になっていると考えられる。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
継続的な開発や圃場整備により、各地で生息適地は確実に狭まっている。加えて、外来の捕食者による直接的、間接的な悪影響も存在すると考えられ、個体数は減り続けていると思われる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

宮古諸島の宮古島と伊良部島の固有種。頭胴長は最大でも 660 mm 程度で、近縁のガラスヒバァよりも明らかに小型。池や河川の近くなど水場で見つかることが多いが、そうでないところにも出現する。本種が分布する 2 つの島の双方で急速に開発が進んでおり、潜在的に生息に適した環境は確実に縮小している。また、イタチなどによる捕食の影響も懸念される。系統的には、ガラスヒバァの沖縄諸島個体群に近く、生物地理学的な観点で高い学術的価値を持つ。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオス 400～530 mm、メス 390～600 mm 程度。腹板数 157～169 枚、尾下板数 94～102 対。体鱗は明瞭なキールをもち、体鱗列数は胴の前部から中部にかけては 19 列、後部では 17 列。背面の地色は黒に近い黒褐色で、胴の前半部にはおよそ 1 鱗長の白い横帯が数本あるが、それらは通常、背中部付近で途切れ、左右でずれるか分離している。白帯は胴の後方では小さな白斑に変わる。頸部に良く目立つ白色の斑紋があるが、琉球の他の同属種と違い、左右のものは大きく離れており、ほとんどの場合、両方がまとまって Y 字状や V 字状にならない。腹面はレモン色ないし象牙色で、腹板の側縁には暗色の小斑がある。

【生活史】

生活史や生態についてはほとんど知見がない。繁殖については、5 月上旬に捕獲された個体が、飼育下で 6 月下旬に長さ 30～35 mm、幅 9～12 mm の白い殻に覆われた 3 卵を産んだ記録がある。野外でサキシマヌマガエルとその幼生、ホオグロヤモリ、サキシマスベトカゲなどの捕食例がある。

【生息環境】

池や河川に隣接した森林の林床に多いが、草原、低木林、疎林などでも観察されている。草本や木本にも登り、地上高 2 m を超える枝の上でも発見されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，小河川
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島と伊良部島に分布する。宮古島のなかでも本種が記録されている地点は非常に限られていた。近年の調査により、新たな場所でも見つかり、個体が確認されている範囲は大幅に広がったが、分布が拡大しているというより、精力的な調査により知見が増えた結果ととらえるべきである。伊良部島では 1959 年と 1960 年に採集された、産地の詳細不明な 2 点の標本が存在するほか、2011 年に島の南東部で路上死体を確認したという情報がある。それ以外に本種の情報はなく、その生息範囲は不明である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

宮古島および伊良部島における本種の分布について、従来の知見があまりにも限られているため、その継時的な動向を評価するのは難しい。伊良部島では近年の発見例がなく、個体群がすでに消滅しているか、存続していたとしても、その分布範囲は極めて限定的である可能性が高い。

【生息地の現況】

主要な産地の一つと考えられる宮古島中北部の緑地は保全林となっているが、ニホンイタチやインドクジャク、外来カメ類の存在によって、小動物の生息地としての質が劣化していると考えられる。また、緑地内の下草の過度な管理もそれを助長している。その他の確認地点の多くは、どこまでが生息範囲なのか評価が難しいぐらい狭い緑地に隣接していて、安定した個体群が存在するのか判然としない場合もある。伊良部島ではニホンイタチの密度が高く、圃場整備により乾燥していて本種の生息に適さない地域が多い。

【個体数の現況】

個体数やその具体的な減少率は不明であるが、潜在的な生息適地は明らかに減少していることから、個体数が減少傾向にあるのは間違いない。伊良部島ではニホンイタチの影響が強く、乾燥している地域も多いため、すでに個体群が消滅している可能性がある。

存続を脅かす要因

圃場整備や開発にともない、潜在的な本種の生息適地は確実に減少している。またイタチなどの外来の捕食者が悪影響を与えていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

宮古諸島の陸生脊椎動物は、八重山諸島あるいは中国大陸に最近縁の種ないし集団をもつものが多く、生物地理学的に沖縄諸島との類縁性は低いとされてきた。しかし、本種は明らかに沖縄諸島の集団に近く、その由来についての説明が難しい存在であった。最近、主に地質学的データに基づき、沖縄諸島と宮古諸島を橋渡しする古陸塊があったとする新説が唱えられ、本種の由来を説明するものとして注目を集めている。このように本種は、島の成因を考える上でも貴重な存在であり、高い学術的価値を有する。加えて本種はガラスヒバァのなかでも沖縄島-久米島の集団に近縁であり、同じガラスヒバァの伊平屋島集団、奄美諸島集団はそれよりも系統的に離れていることから、本種群の分類を考える上でも重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2019：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2018：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2017：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2015：	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN

第４次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN
第３次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN
第２次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 角田羊平・青柳 克・徳山孟伸・才木美香・笹井隆秀・戸田守・前之園唯史，2016．宮古島および伊良部島における稀少なヘビ 2 種，ミヤコヒバァとサキシマバイカダの観察例．Akamata，26: 25‐30.
- 皆藤琢磨，2016．頸部に Y 字模様をもつミヤコヒバァ標本について．Akamata，26: 38‐40.
- Kaito, T. and Toda, M., 2016. The biogeographical history of Asian keel back snakes of the genus *Hebius* (Squamata: Colubridae: Natricinae) in the Ryukyu Archipelago, Japan. Biol. J. Linn.Soc., 118: 187–199.
- 皆藤琢磨・戸田守．2021．ヤコヒバァ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 179-181．サンライズ出版，彦根.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38.
- 太田英利，1996．ミヤコヒバァ．千石正一・松 井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科 第 5 巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類，pp. 100．平凡社，東京.
- Ota, H. and S. Iwanaga, 1997. A systematic review of the snakes allied to *Amphiesma pryeri* (Boulenger) (Squamata : Colubridae) in the Ryukyu Archipelago, Zool. J. Linn. Soc., 121: 339–360.
- 太田英利・高橋 健，1997．ミヤコヒバァ（*Amphiesma concelarum* Malnate，1963）の伊良部島からの記録．沖縄生物学会誌，35: 47‐48.
- 当山昌直，2005．ミヤコヒバァ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 117．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Watanabe, N., K. Arai, M. Otsubo, M. Toda, A. Tominaga, S. Chiyonobu, T. Sato, T, Ikeda, A. Takahashi, H. Ota, and Y. Iryu, 2023. Geological history of the land area between Okinawa Jima and Miyako Jima of the Ryukyu Islands, Japan, and its phylogeographical significance for the terrestrial organisms of these and adjacent islands. Prog. Earth Planet. Sci., 10: 40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hebius concelarus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hebius concelarus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Small river
Threat types:	Field preparation, Grassland development, Land development, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月